

アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算 8 年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、6 名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が 3 名いたことも悲しい事実です。

第五章 後藤ドクターとの交流と悲報

待ちに待った筆者の家族がカフジに到着したのは、赴任後七か月半の後だった。四歳の長男と一歳半の長女は可愛い盛りだった。初めての海外渡航が、フライトだけで二十時間もかかるとんでもないアラブの僻地であり、苦勞して子供たちを連れて来てくれた妻には心から感謝した。

『アラビア湾の漁労長』として腕を上げていた筆者は、妻子の到着に合わせて各種のアラビア湾の海の幸を大量にストックしていた。社宅には米国製大型冷凍冷蔵庫が備えられていたが、さらに筆者は別の大型冷凍庫を購入していたくらいだ。

妻の美和子は料理が得意であった。

岡本亭での週末のパーティは盛大に開催された。家庭の事情から単身赴任を余儀なくされている先輩世代は、我が家で供される家庭料理に心からの癒しを喜んでくれていた。もちろん、命の恩人である後藤ドクターはレギュラーメンバー筆頭として常に座の中心にいた。ドクターは妻に感謝するとともに、ふたりの子

供を自分の孫のように慈しんでくれたし、筆者には息子像を感じてくれていたようだ。

後藤は謙虚な高德の士であった。筆者が危篤状態から救い上げて頂いたと感謝するのに自らが驕ることはなく、さらりと医者としての哲学を述べるだけであった。

「医者が救ってあげたなどと自惚れてはいけませんな。病気は患者さんご自身が治すのです。医者はそれをサポートするだけで、全ては天命のなせる業ということですね」

ある日、ちょっとした伝言に単身寮のドクターの部屋を訪れて驚いた。半年に及ぶ付き合いだが、部屋に入るのはそれが初めてだった。妻を迎えるための所帯道具の梱包ダンボールは山ほど船便で届いていたのだが、どれも開けた様子がない。コップは自分用にひとつしかなく、来室者にお茶を供する準備すらなかった。仕事以外の事は一切女房任せで、家事など何もできない典型的な大正世代なのだ。

『これじゃ、体調壊すわ』

それ以来、ドクターだけは週三回食事に招くことにした。ドクターも素直にその好意に甘えて、招待日以外にも時々頼みごとの深夜電話が掛かってきた。

「岡本さん。どうしてもお茶漬けが食べたくなりましてなあ・・・」

『寂しがっておられるな』

大至急のお茶漬けの出前に、妻は日本から持ち込んだ材料で作った糠床から漬物を添えることを忘れなかった。

信頼が深まるにつれ、本来が慎ましく我慢強い大正人が素直に愚痴を言える唯一の対象は筆者だけになったようだ。

「本社人事部の説明と実態が全然違っていて、ひどいもんですね。日本人だけ診察すれば良いという条件で来たのに、現地人も診なきゃいかんのですよ。医者ですからそれは受け入れるとして、アラブ人の女性を診察すると、入浴の風習がないから、その臭いことったらありませんなあ」

おまけに、夫以外の異性に顔すら見せてはいけないタブーがあるくらいだから、必ず亭主が診療室までついてきて、横からあれこれ文句をつける。

触診などしようものなら、『触るな！』と怒鳴るらしい。看護師兼通訳の平良が、なんとか取りなすのだが、診療を阻害することはなはだしい。

念願の医者を確認するために、本社ではどうしても実態より甘い話をする。本来、家族を迎えるのに半年は要する実情なのだが、極力急がせるとの約束が守られることがなかった。

「私は怒りましたよ！ 今日、吉田部長にはキッチリ詫びを入れて貰いました。だからと言って事態が好転する訳じゃありませんがね」

着任半年を迎えて、ドクターは吉田に話が違うと抗議した。吉田が労務部に質したところ、ノイローゼから脱せないでいる日本人担当者の大ミスで、後藤は単身赴任者だと石油省に登録していたことが解ったのだ。半年も無駄にしてから、仕切り直しの家族ビザ申請となってしまった。

筆者には、妻の到着を切望するドクターに慰めの言葉もなかった。

「まあ、万事そんな現場なんですよ。僕だって、家族を呼ぶのに七か月半もかかったくらいです。今度こそ労務部も真剣にやるでしょうから、もう少し待って下さい。当面、我が家の居候で我慢して下さいよ」

当然のことながら、筆者は招待頻度を上げてファミリーぐるみで励ました。

一方、人生の大先達であるドクターは話題も豊富で、岡本亭の来客を楽しませてくれた。新聞もテレビもなく目新しい話題がほとんどない僻地勤務だから、珍しい体験談が絶好の話題として大歓迎されるのだ。

太平洋戦争中は軍医長として駆逐艦に乗っていた海軍大尉だから、その種の話は他の誰にもできなかった。

「あれほど、気分が良くって暇な仕事はありませんでしたなあ」

それはそうだろう。徴兵検査を合格してきた健康優良児が訓練と任務に明け暮れているのだから、平時にはめったに患者などいるはずがない。しかも、艦長に次ぐ存在として、全ての乗員から尊敬を集めている名誉溢れる立場だ。

「よく、従兵に言ったものですよ。腕が鈍って仕方ないから誰か盲腸炎になれ！俺に切らせろ！」

ドクターの懐旧談は、岡本亭の来客を爆笑させた。

「最後には、とうとうアメリカの潜水艦の魚雷攻撃で撃沈されたんですがね。そういう場合、軍医長が最優先で助けられるんですよ。僚艦から救助カッターが来るんですが、『軍医長殿！軍医長はおられますか！』と探してくれるんですなあ。もっとも、僚艦に引き上げられてからが、重傷者の治療で地獄の有り様でしたけど。ハハハ」

ドクターは麻雀が得意であったので、接待する上では楽だった。飲み食いが一段落すると、一卓囲むのがお定まりのコースなのだが、軍医長殿は喜んで興じてくれるので、精神衛生上は非常に効果的だと観察できた。

「ドクター、また高そうな手で待っているんでしょう。医者が聴牌（テンパイ）するからイシャテン（イーシャンテン：一向聴）って言うのかなあ」

「まあ、岡本さん。そんな下手なシャレを考えてる暇があったら、真剣に勝負すること考えなさい」

会社への怨念を拭えないでいるドクターも、岡本亭で寛いでいる時だけは癒されていた。

「ア、それ。ロン！ですな。たいしたことありませんわ、満願止まりですな」

平良看護師は、夜のドクターの所在を常に把握していた。急患往診に備えるためだ。しかし、後藤ドクターの場合は、週の半分以上は岡本亭に居るのだから簡単に探し出せた。

その夜も、平良から緊急コールが入った。

「岡本さん、出張者宿舎で急患が出たらしいんで行ってやらなきゃなりません。ちょっと雀牌はこのまま伏せておいて、後で続きをしましょう」

「患者は誰だと言ってましたか？」

「本社営業部から来ている植松さんとか言ってましたな」

「ああ、あいつですか。病気じゃありませんよ。先生に診て頂くだけで治ります。たった二週間だけの体験出張で俺のところにきてますが、こんなひどい現場かとカルチャーショックで参っただけすわ」

状況を把握している筆者のコメントによって、ドクターは患者に問診する必要がなくなった。

「ああ、カフジではよくある例ですな。ビタミン注射でもうてば治りますな」
ドクターを車で案内した筆者は、部屋の入り口で明るい大声を出した。

「おい！ 植松、安心しろ。大先生に来て頂いたぞ！」

型通りに患者の弱音を聞いてあげたドクターは、筆者を看護師代わりにした。

「それじゃ、特効薬を注射しておきましょう。岡本さん、患者さんのお尻を出して頂けますか」

ビタミン剤を注射してもらって、気死していた出張者の息づかいは平常に戻った。ふたりは、雀敵を待たせたままの社宅へ車を飛ばしたことは言うまでもなかった。

結局、後藤夫人が到着したのは、着任のちょうど一年後であった。

週末、岡本亭へ集う仲間たちは清楚で上品な夫人の参加を心から歓迎した。

着任後一年も経っていたので、長期休暇取得の権利が発生しており、間もなく夫妻はヨーロッパ周遊を経て日本へ帰国して心からの休養に入った。日本を留守にしていた一年間には、長男夫婦に最愛の初孫が誕生しており、生まれて半年目にやっと我が手で抱くことができたのだ。

晴れやかな笑顔で、カフジに戻った後藤夫妻であったが、その間のクウェイト空港への出入国と送迎は、当然筆者が一切のお世話をした。

僻地生活のストレスを発散するために、カフジの住人は北へ 150 キロの中東随一の近代都市クウェイトに買い物に行くのが最高の贅沢であった。

我が家も月に一度は、ウインドウショッピングを楽しんだり、日本食の食材を大量仕入れするために訪れたものだ。その際は必ずドクター夫妻もお連れしたの

だが、大型の愛車シボレーは収容能力に問題はなかった。

ヒルトンホテルにある中東で一軒しかない日本食レストラン『慶』は、一流との評価を受けており、カフジの住民が必ず訪れるオアシスであった。

オーダーした料理を待つ間に、ドクターが突然騒ぎ出したのには驚かされた。

「おいっ！ 水だ、水を持ってこい！ 急げ、急ぐんだ！」

典型的な大正人のドクターは、夫人が横にいと正直な関白ぶりが出るらしい。運ばれたコップにポケットから出した粉末を大量に注ぎ込んで攪拌して、これを一気に飲み干した。あっけにとられた筆者が理由を質すと、やっと平静を取り戻したドクターが説明した。

「フウ！ いや、失礼しました。今、急激に血糖値が下がったものですからね」
飲んだ白い粉は、血糖値を調整するためのブドウ糖だったそうだ。

夫人も、説明を補足した。

「主人の糖尿病、かなり重症なんですよ」

持病を初めて聞いた筆者は驚いた。ドクターがストレス解消のためにと、どれだけ暴飲暴食されたか解らないほどだ。岡本亭で家庭料理を食べて頂いた範囲では妻が栄養バランスは考慮していたはずだが、それ以外の現場での食事は糖尿病への配慮など全くなされていない。自分では身の周りのことなど何ひとつできないドクターのことだから、野菜不足や飲食の不規則不摂生などで良好な環境であったはずがない。しかも、本社での契約に反して一年間も夫人を呼び寄せられなかった状況はストレスを加速した最悪のものだったに違いない。

カフジ住民全員の敬意と感謝に見送られて、後藤ドクターは二年間の契約を終えて帰国した。クウェイト空港までお送りしたのは、当然筆者の車だったし、家族全員で送迎ゲートまでお見送りした。晴れやかなドクター夫妻の笑顔とは対照的に、家族同様に過ごした妻も子供たちも寂しさを隠せなかった。

二週間後、ドクターからは駐在時代の我が家との交流を心から感謝する旨のお礼状が届いた。ご縁が深かった分だけ、寂しさはひとしおのものがあつたが、ドクターが健康に心配のない安全圏へ戻ったことには安心を覚えたものだ。

突然の悲報が伝わったのは、それから二か月後のことだった。

「岡本くん、大変だ！ 後藤ドクターが亡くなられたそうだ！」

ふたりの親交をよく承知している労務部の三浦が、デスクに飛んできた。

「エッ、そんな馬鹿な！ 元気に帰国されたばかりじゃないですか。先日も、ご丁寧なお礼状を頂戴したばかりですよ」

カフジでの苛酷な環境が、ドクターの寿命を縮めてしまったことは疑う余地がなかった。安全な日本へ帰り、一族に囲まれ可愛い初孫を抱いて、緊張がほぐれたところを、二年間の蓄積過労が襲ったのだろう。突然の心筋梗塞で苦しむ間も

なかったというのが、せめてもの救いだった。筆者にできることは、東方に向かって黙祷を捧げることしかなかった。

直ちに筆者が取った行動は、お香典を募ることだった。

「三浦さん、各現場からのお香典は、俺が集める。あなたは本館周辺の日本人からお香典を集めて下さい。それから、いちばん最寄りの日程で休暇帰国するのは誰か確認しましょう」

現場業務に従事するための各自の資材を保管する必要から、鉱業所の各部事務所は3キロ四方に分散してレイアウトされている。筆者は、全日本人従業員に訃報を伝えるとともにお香典を徴収して回った。尊敬を集めていた後藤ドクターのことだから、仲間たちからは邦貨換算 70 万円を超えるお香典が供された。

3 日後に長期休暇で帰国することになっていた製油部の岡山が、鉱業所を代表してお悔やみに参上することになり、せめてもの従業員の志をお届けした。

それから一ヶ月後、筆者は後藤ドクターの思い遣りに号泣することとなった。カフジの現場には、日本からの資材船が年に二、三隻入港する。本来目的はパイプラインその他の石油操業上必要とされる資材の運搬なのだが、家族帯同赴任者の所帯道具や単身赴任者の留守宅からの慰問品なども便乗して積み込まれる。貨物船の到着を受けて、資材部の遠藤から電話が入った。

「岡本さんにも、荷物が一箱届いてますよ。それが、ナント、亡くなられたドクターからなんですよね」

驚いた筆者は、資材倉庫まで飛んで行ってダンボール箱を受け取った。

開包すると蓋の裏には感謝の気持ちを綴った手紙が貼りつけてあった。慰問箱の中には、筆者夫婦の嗜好を配慮した珍味や缶詰類とともに、子供たちが大喜びしそうな玩具とお菓子が山ほど詰め込まれていた。

手紙の日付は、逝去の一週間前だった。感謝と思い遣りの籠った手紙は、後藤ドクターの遺書となった。日本で再会した暁には、今度は自分がしこたまご馳走したいと書かれた文章に筆者の涙が止まらなかった。

筆者のその年の長期休暇帰国は二か月後だった。

総武線原木中山駅で待ち合わせていた後藤夫人が、近くの菩提寺まで案内してくれたのだが、墓石の側面の逝去日付と『後藤忠義』という文字の彫り込み跡の新しさがまた涙をそそった。

筆者は線香の代わりに、ドクターが嗜好した高級煙草の『峰』に火をつけて墓前に供えた。そして、自らも一本吸い終わるまで、墓石の中に命の恩人の慈顔を感じながら、僅か半年前まで和やかに談笑していたドクターを偲んでいた。幼い子供たちも、父親の心の中の対話が終るまでおとなしくしていた。

近所にある自宅で、筆者は夫人からドクターの遺言を伝えられた。

引き戸を開けた押入れには、ウイスキーを始めとする洋酒の山が詰まっていた。

「主人は、これをすべて音在さんに差し上げるようにと申しておりました」
都立病院の院長まで勤め上げた後藤ドクターには、感謝する患者や出入りの製薬メーカーなどからの贈答品が多かったに違いない。

ところが、初老期に入ってから重い糖尿病に罹ったため、夫人からは酒を禁止されていたのだった。ふたりの御子息は夫人に似て全く酒を飲めないため、一向に減らない在庫を、筆者に消費させようと楽しみに帰国を待っておられたとのことだった。

「どうぞ、主人の代わりに賞味してあげて下さいね」

恐縮する筆者に、夫人はとりあえずにと、大型の紙袋二つに沢山の高級ウイスキーを詰め込んだ。帰路、両手に伝わる荷物の重さが、いつまでもドクターの感謝と愛情を伝えてくれていた。



カフジの我が社宅で寛いで頂いた故後藤忠義ドクター。

お相手するのは、当時3歳の長女とコントラクターの小熊さん。



おかもと・ふみお

1947年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田吉隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」(財界研究所刊)を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段(クウェート国柔道連盟七段)。

To be continued